

# あしがき

## 大学教授も勉強しなくては……

昨年3月まで北海道大学大学院環境科学院の私の研究室で学んでいた福岳涉さんは、『もうひとつの北海道環境白書2012』の制作に参加した一人です。彼は修士論文のための研究テーマにこの本を選び、《1》作り手たちはこの本で何を学んだのか、《2》行政版の環境白書との違いは何か、《3》行政の環境政策担当者はこの市民版白書をどう評価したか、《4》対象読者（前作は大学生を想定して編集されました）に作り手の意図は届いたか、という4つの視点から作り手と読者の双方に聞き取り調査を行ないました。

自身も活動に関与しながらその過程や結果を調査する「アクションリサーチ」という手法です。客観性を保つのが難しい面もありますが、当事者たちの時々の行動や想いを詳細に記述・検討できるという利点があります。また、研究成果を積極的かつ時間差なく現場にフィードバックできます。

リサーチからはこんなことが浮かび上がってきました。まず《1》から。作り手たちは立場や考え方を異にしながらも「北海道の20年間を伝える」という使命感を持って集まっていました。多くが「制作を通じて個々の視野が

拡がり統合的な知識を得ることができた」といい、本格出版ゆえに制作に費やす時間的・資金的な負担が大きく「継続にはもう一工夫が必要」と感じながらも、「得られたものはそれ以上に大きい」と答えています。

《2》はどうでしょう。行政版と比べて市民版は全分野を網羅しているとはいえないものの、環境省にとどまらず農林水産省や経済産業省などの公表データをふんだんに用い、環境の範囲をより広く捉えています。また行政版が主として「データとその解説」という構成なのに対し、市民版は当事者インタビューが主役で、その内容を補強するためにデータを援用している、といったコンセプトの違いが見られます。単なる白書というより「北海道持続可能性白書」とでも呼んだほうがぴったりかもしれません。

《3》では、いわば本家の担当者たちから「登場人物のセレクトが素晴らしい」「読み物として非常に面白い」「ストーリーとともに環境の知識が伝えられ、この分野に興味のない人も読みやすいのでは」といった評価が寄せられました。さらに、「いつか行政と中間支援組織と大学が連携し、第1部をみなさんが、第2部をわれわれ行政が担当して白書を作るというのはどうでしょう」という積極的な意見も飛び出しています。

《4》の調査にあたって、福岳さんは念入りな手続きを踏んでいます。「環境問題に興味がある学生ばかり集めてしまうと評価が偏ってしまう」と、札幌圏のいくつかの他大学で「白書を読むアルバイトの募集」というかたちでモニターを集めたのです。環境に強い関心がある人から全くない人まで42人を採用し、インタビュアーもモニター調査に熟練した第三者を用意する、という周到さでした。

この大学生読者インタビューでは、ほぼ全員が「この本を読む機会が得られてよかった」と述べています。5点満点で点数をつけてもらったところ、平均点は3.83点と出ました。中には環境問題に全く興味がないと言っていた学生も含まれるので、十分に高い評価といえるでしょう。

このインタビューの集計から改めて分かったのは、大学生たちは、自分もともと持っている思想や経験に近いことに対して知見を深める傾向にある、

ということです。言い換えれば「自分のことには関心があるが、想像できないものに対しては無関心のまま」ということです。

とすれば、本の作り手が読者に対して意図を効果的に伝えようと思ったら、まずは読者の身近な話題と関連づけて内容を表現すべきです。

でもそれとともに、大学教員の立場から言わせてもらおうと、大学生には自分の生まれ育った環境とは異なる環境や立場に対する想像力を高め、身近ではない問題も適切に俯瞰できる力を培ってほしい、と願っています。これは「持続可能な開発のための教育（ESD）」が掲げる目標の一つでもあります。

話を福岳さんのリサーチに戻すと、モニターたちには「何かのきっかけで新しい知識や思想に気づいた際にはその意外性を評価する」という傾向も見られました。このグループの人たちには、この本をきっかけに新たなことに取り組もうとする意識変化がありました。作り手の意図がちゃんと通じたことが証明されて、関係者としてはとても嬉しい反響でした。

さて、こんな綿密なりサーチの結果を踏まえて、新たに誕生したのが本書です。

この本には、14人のパイオニアたちが登場します。15年前に東京から札幌に移ってきた私は、実は本書の企画書類に目を通すまで、恥ずかしながら半分くらいのお名前しか存じ上げませんでした。でも語り下ろしや座談会の原稿を読んで、これまでお目にかかったことのない方たちも含め、それぞれのライフワークに寄せる非常に強い想いに触れて感銘を受けました。パイオニアたちは人生の転機を迎えた場面についてめいめい詳しく語っています。「もし自分だったら？」と想像しながら読みすすめると、彼らがその時に発揮したケタ違いの迫力がいっそう伝わってくるはずです。あるいは「自分が暮らしている周辺状況に置き換えたら？」と考えたら、「もう一歩先」の行動への勇気やヒントが得られるでしょう。もちろん、北海道の自然の豊かさ、人々のつながりの大切さ、地域ごとの個性に改めて気づかされます。この財産をどう次世代に引き継ぐか、知識を北海道民にどう活用してもらうか……。大学教授ももっと勉強せねば、と考えさせられました。

こんな本書が、読者のみなさんの「新たなことに取り組もうとする意識変化」のきっかけになったら、と願ってやみません。

この本には、パイオニア10人の語り下ろしと同じく4人のみなさんの座談会、専門家6人のみなさんによる解説コラムが収録されています。長時間にわたるインタビュー取材や座談会への参加を快く引き受けて下さったみなさまに、この場を借りて深く感謝申し上げます。また昨年度に引き続き本書の出版を手厚く支援くださった公益財団法人秋山記念生命科学振興財団に心よりお礼申し上げます。

本書は環境省・北海道・札幌市、そして市民が参画する「環境中間支援会議・北海道」と、支援会議と連携協定を結ぶ北海道大学大学院環境科学院によって編集・制作されました。どんなコンセプトでいこうか？ どんな方たちにご登場を願おうか？ 今回も議論に議論を重ねながら、参加団体同士をつなぐ機能がどんどん強化されていった気がします。と同時に中間支援会議の立ち位置を自ら確認する貴重な機会になりました。今号までで計26人のパイオニアのみなさんに登場いただきましたが、私たちが「お話をうかがいたいパイオニア」は道内にまだ大勢いらっしゃいます。この気持ちが中間支援会議の今後の原動力となっていくと思います。

最後になりましたが、インタビューや録音起こしなどの作業に参加されたスタッフのみなさん、本当にご苦労さまでした。編集の実務を担当された北海道環境財団の内山到さん、環境省北海道環境パートナーシップオフィスの倉博子さん、編集の平田剛士さん（フリー）、デザインの楳斐明広さん（フリー）、富士プリント株式会社の森山浩さんの奮闘を称えます。

北海道大学大学院環境科学院教授

**山中 康裕**